

古都に生きる日本人妻から学ぶ

杉山 雅 宏

1. はじめに

韓国慶尚北道慶州市にある慶州ナザレ園は、韓国でただ一つの日本人女性のための老人ホームである。1972年、韓国の社会福祉協議会の会長を務めるクリスチアンの社会事業家、金龍成（キム・ヨンソン）氏が、日本人妻たちの窮状を見かねて設立した施設である。

この日本人妻たちは、日本が韓国を併合していた終戦前、留学や徴用で渡日していた韓国青年と夫婦になったり、日本政府が植民地支配の政策として推し進めた内鮮一体のかけ声のもと、朝鮮人の青年と見合い結婚をしていったりした日本人妻たちである。

その他、本人の意思と関わりなく戦前に両親に連れられて渡ってきたケース、また、日本で韓国人の夫と結ばれ、戦後に独立した夫の祖国に帰国したケースと幾つかの形態がある。



慶州ナザレ園

これらの日本人妻たちは、日本の韓国併合、そして日本の敗戦、韓国の独立、さらに悲劇の追い打ちのような朝鮮戦争と歴史に翻弄される中で、夫や子どもたちに先立たれ、その後異国で生活の困窮と老いの日々を迎えている。

韓国の青年を愛し、内鮮一体のもと玄界灘を渡った若き花嫁たちも歴史の狭間に落ち込んでしまった人生かもしれない。

このような日本人妻たちに手を差し伸べたのは、日本政府でも韓国政府でもない、ひとりの韓国人福祉家であった。

金龍成が設立した韓国のお年寄りのための養護老人ホーム・特別養護老人ホーム・親や保護者のいない子どもたちの施設があるが、それに隣接しているナザレ園は、それらのどこよりも恵まれている施設であると訪問した誰もが異口同音に語る。

作家の故上坂冬子は、旅行先で慶州ナザレ園の存在を偶然知った。そして、ナザレ園で生活する老女たちの生い立ちからナザレ園に至りついた経緯を实名入りで詳細に報告した（上坂，1992）。それは凄惨を極める、日本人だから差別され戦後の韓国でも最低の生活を強いられた。多くの日本人女性にとってはたまたま愛した男性が朝鮮人であり、愛する夫を信じて韓国に渡ってきただけである。家族の反対も振り切り愛する人を求め、まさしくそれは恋の逃避行であった。すべて愛に生きた結末だったが国際結婚と戦争により不幸になった女性の生涯である。上坂の報告がきっかけで、ナザレ園はマスコミでも取り上げられるようになった。「ナザレ」とは、キリストの母マリアとその夫ヨセフの生まれた場所、つまり偉大なる故郷とのことである。

日本人間関係学会では、毎年韓国の福祉事情を学ぶために、ソウル市内を中心とした福祉系大学や福祉施設視察研修を実施している。本年度は研修プログラムに、慶州ナザレ園視察が組み込まれた。ようやくナザレ園を

訪問する機会を得たため、研修報告としてナザレ園訪問記をまとめることにした。

2. 慶州ナザレ園

(1) 社会福祉法人ナザレ園（日系婦人保護施設 慶州ナザレ園）

(2) 所在地は大韓民国慶州市九政洞 616－51

慶州市はBC57年から935年までの間、新羅の首都であった。往時は100万人もの都人が住んでいて、絢爛たる文化と政治の中心であった。現在は人口26万人程度の地方都市であるが、韓国一の文化遺産の街であり観光地でもある。市全体が屋根のない博物館と称される。仏教文化に彩られる古都の象徴は仏国寺であり、ナザレ園は仏国寺のすぐ近くにある。

(3) 沿革

1) 第二次世界大戦中、韓国青年と日本で結ばれた日本婦人が終戦前後、夫に同伴され来韓定着した日本婦人か、韓国で生活している間に派生した身寄りのない心身障害者、孤独高齢者及び困窮している帰国希望者の永年帰国便宜と老弱者の生活保護をしている国内唯一の施設である。



利用者の憩いの場として活用される中庭

2) 1972年10月に創立され、民間社会福祉事業として経営されている。その間、日本帰国者150余人の日本への永年帰国便宜を図った。尚、帰国意思のない孤独高齢者の生活保護をしている。

3) 国内に日系婦人が約500人住んでいるが、その中で困窮している100余世帯を選定し、毎月住宅援助金を送金している。

3. ナザレ園設立までの歴史的背景

1910年の日韓併合条約の締結により、韓国は統治権を完全かつ永久に日本に譲渡することを約束した。これにより日本は、領土的支配だけでなく韓国独自の文化や言葉をも否定し、それまでも増した強引な支配体制をとった。その後、第一次世界大戦に続き、第二次世界大戦が勃発した。

1945年、日本が第二次世界大戦に敗れたことを機に、それまで長年、韓国国民の心に刻まれていた反日感情が一気に噴き出し、全土で独立戦争が起こった。ここに、ようやく36年間の苦渋に満ちた日本の支配から逃れることとなった。

一方、この戦争中に多くの日本人女性が韓国青年と日本で結婚し、終戦前後、夫に伴って韓国に移り住んでいた。折しも、韓国内では36年間の恨みに満ちた反日感情が渦巻いており、日本人軽視の風潮の中、日本人妻たちは身をひそめ隠れるようにして生きていくことを余儀なくされたのである。

1950年、朝鮮戦争が勃発。動乱の中で多くの日本人妻たちは夫や子どもと生き別れ、中には戸籍を失うものまで出てきた。戸籍を失えば日本に帰国することもできず、仮に日本人であることが証明されても、愛する夫や子どもが今も韓国のどこかで生きていると思えば、肉親を残して一人帰国することもままならぬ状況で、多くの日本人妻たちは異国の地でたった一人生きていくことになった。

4. ナザレ園創設者 金龍成について

金龍成氏がどうして日本人のためにこうした施設を作ったかについては、誰もが疑問に感じているであろう。彼は幼くして母親を亡くし、父親は独立の抗日運動の志士であり、逮捕されて生涯の大半を獄中で過ごした。彼が19歳のときに一度だけ、獄中での父親と面会している。そのときに「政治では人を救えない。人を救うのは教育、文化、芸術しかない」（宋・喜田，2008）と教えられた。これが彼のすべての原点になっている。

さらに、彼は学生時代にクラスの日本人女性と親しくなった。しかし、親しくなった女性が日本人であるという理由だけで、交際することは許されなかったという。1945年8月15日を境に、“敗れた国民”として白日にさらされる人を目の当たりにし、彼はいたたまれずに、人を憎まず国策を憎むことを痛感したのである。

彼自身、両親がいないに等しい状況で育ったのに、こうした保護施設を作ったのは彼の生い立ちからもわかる気がする。そこには大勢の日本人の子どもが入ってきた。なかには3歳位の日本人幼児が真冬に汽車で小荷物扱いで送られてきたこともあったそうだ。その子どもは凍傷で間もなく息を引き取ったそうだ。

金龍成氏にとっては、国籍にかかわらずたとえ日本人であろうと困っている人々を目の前で放っておけなかったのである。父親まで日本人に殺され、日本を憎むべき彼が、差別と異文化や貧困で苦しむ日本人女性を助けた存在であることは特筆すべきである。

彼は、人が人を差別することはもちろんのこと、国が国を差別することの醜さをも身をもって知っていた。どんなにこの土地で長く暮らしても日本人が韓国人になることはありえず、また、その逆もあり得ないということである。上坂（1992）も日本人の妻たちを「帰国船に乗り遅れた国際迷子」と表現している。まさしく二つの国の狭間に忘れ去られた日韓史の生

き証人であり、忘れてはいけない悲劇であると記述している。

金龍成氏はナザレ園設立1年前に、忠清南道の大田刑務所に収容されている日本人妻二人に面会した。「キリスト教信者の日本人・故菊地政一さんと刑務所を訪ねました。一人は寝たきりの夫をかかえ一家心中を図ろうと家に放火した罪で、もう一人は生活苦ゆえに米を盗んで収監中の日本人妻でした。私は身元引受人として責任を負うことにして、内務省にお願いしたところ、釈放になりました。それが、私がこの地でやっていた社会福祉施設に日本人を迎えることのおこりです」(ソ・ヒョンソプ, 2001)と金氏は語る。当時の反日感情は今よりもはるかに厳しかったことは想像に難くない。韓国青年団の泥棒をたずさえた激しい抗議行動にも屈することはなかった。

5. 入所者との語らい

園内の第一印象は、広くてきれい、建物が思った以上にたくさんあった。中庭もあり、落ち着いた雰囲気建物だった。

最初に、園長の宋美虎氏が迎えてくださり、ナザレ園の歴史をビデオ視



利用者の個室は広々としている

聴した。続いて、故上坂冬子がナザレ園を紹介して日本で放映されたテレビ番組のビデオも視聴した。韓国内には、このような境遇の日本人女性がざっと1,000人近くもいて、この施設ではとても間に合わなかった。年月を経て、そうした方々が徐々に亡くなられて数が減るものの、まだまだ施設の需要はなくなりそうにない。

現在、ナザレ園には24人の日本人が暮らし、平均年齢は87歳である。敷地内には韓国人のための老人ホームが何棟か併設されている。将来的には、そうした韓国の老人のための施設になる予定だが、今のところは未定であるという。

部屋を見せていただいたが、清潔で整理整頓が行き届いていて、広々とした印象を受けた。

入所者と対面し、「ふるさと」「青い山脈」「赤とんぼ」「幸せなら手をたたこう」等を全員で合唱、楽しいひと時を過ごすことができた。何人かの利用者と直接話をすることができた。



施設内のいたるところに談話スペースがある

(1) 93歳のAさん

93歳になるAさんは車いすに座っていた。手の動きもぎこちなかった。

「2年前に脳梗塞をやりました。食べることや書くことが好きな私に、神様が指先の自由だけは残してくれました」と、少し涙ぐんで話してくれた。

Aさんは日本が朝鮮半島を統治していた時代に、現在の韓国慶尚北道で生まれた。大邱の就職先で出会った朝鮮人男性と結婚した。義父の方針で家ではいつも韓国語。そのため、初めは全くわからなかったが、これも運命と思い一人娘にも日本語は教えなかった。終戦後も子どものために思い、とどまった。

寂しさを癒してくれたのは、大邱の芙蓉会の集まりだった。同じような境遇の日本人女性たちが集まり、大きな声で童謡を歌った。月に一度の例会の前夜は、興奮して眠れなかったという。

娘は結婚し、夫は30年ほど前に先立った。その後は、一人暮らしをしていたが、様々な病気に苛まれた。「娘に迷惑をかけたくない」という気持ちから、2001年にナザレ園に入った。

今一番の楽しみは、日本からの訪問客と日本の歌を歌うことだという。元気よく「幸せなら手をたたこう」の替え歌を歌ってくれた。「幸せなら笑いましょう」「幸せならこんにちは」など、歌詞がどんどん増えていく



食堂は広々している



廊下もゆったりとしたスペース

のである。

ナザレ園のお年寄りの方々に対しては、「日本に帰れない」ということで頭の中には暗いイメージがあったが、予想外の明るさに驚いた。

(2) リーダー格のBさん

「園長先生、美人でしょう。気がやさしくて、頭もいいよ。それが、私たち日本人のせいで、嫁にも行かないで……」とリーダー格のBさんが私たちに園長の宋さんのことを自慢する。宋さんは、感極まって涙した。Bさんは私たちには「ふるさと」を歌ってくれた。リーダーのBさんが歌いだすと、不思議とみんなも歌いだす。「兎追いし彼の山……、忘れ難き故郷」。同行した仲間も一緒に歌ううちに涙を流す場面もあった。

「ここに入り、私よりももっと苦勞している人がいることがわかった。ここは天国です。日本に帰国した人からも、またここに帰りたいたいってくる」。Bさんの隣にいた人がそういった。過去の不幸を嘆く涙が乾いてしまったというより、むしろ日本にはなく韓国で得られた老後の幸福を実感しているのである。だからこそ、日本人妻たちは今泣かないのである。「よくも今日まで生きてきたものだと思います。こうして生きてこられた

のは日本政府のおかげでも韓国政府のおかげでもなく、私たちと同じように苦しい目に遭いながら親切にしてくれた、この国の人たちのおかげですよ」と感謝の言葉を述べていた。

(3) 孤老女Cさん

ナザレ園訪問時は、身の上話をこちらからはことさら聞かないように心がけた。しかし、1年ほど前にここに来たCさんがこんな話を私たちにしてくれた。

Cさんは韓国人の夫に死に別れて30年、友人とともにソウルで小さな洋品店を営んでいた。しかし、大手術を必要とする難病にかかり、貯金を使い果たした。手術は成功したが、働くことは無理な身体になり、自殺を決意した。韓国の名勝、雲岳山に行き、農薬自殺を図ったが、不成功だった。

Cさんは病院に運ばれ助かったものの、韓国には外国人に対する医療や生活扶助の制度はない。困り果てた医師は、寸又峽事件の金嬉老元無期因が帰国後ただちにナザレ園を訪問したニュースを、たまたま韓国のテレビで観ていたときのことを思い出した。そして、Cさんはナザレ園に迎えられた。金嬉老氏なくして、彼女の幸福な今日はないという因縁話であった。私は「なぜ、金嬉老氏はナザレ園を訪れたのかしら？」とCさんに尋ねた。「金氏は日本人が嫌いなのではなく、韓国人を嫌いな日本人を憎んでいるのです。その点、ナザレ園の日本人妻たちは、韓国人である夫を愛してくれた。だから、金氏は、感謝するためにやってきたのです」とCさんは説明してくれた。

6. 園長宋美虎氏の話

ナザレ園の入所者たちは、ふだんは近くの市場に出かけたり、花札をしたり、自室で日本のテレビを観たりして楽しんでいる。そうした姿をやさしく見守るのが、金龍成の遺志を受け継いだ、宋美虎（ソンミホ）氏である。

宋美虎氏は日本語がとても上手である。もともと日本の大学留学志望で、2～3ヵ月のボランティアのつもりでナザレ園に来たのがおよそ30年前。日本語を学習しているうちにここに居ついてしまった。入所者たちが「ここは天国」というのを聞き、離れられなくなった。少しでも長く、豊かに、安らかに生活させてあげたいと思っているようだ。ナザレ園に来てからのリハビリで再び歩けるようになった人もいる。

これまで、宋氏の前で70人を超える入園者が天国に召されたという。老いは否応なく迫るが、宋氏は「おばあちゃんたちは日韓のかけ橋です。だから、長生をする使命があるのです」と力強く語った。

7. 雑感

日韓の不幸な関係の中で、新羅の古都の一隅に展開した人間ドラマを目の当たりにした。小さな舞台での出来事かもしれないが、テーマは偉大である。その演出者でもあり、主役でもある金龍成の父親は、日本の植民地時代朝鮮独立運動家で日本の官憲の拷問を受け、刑務所で獄死した。金龍成は政治ではなく、キリスト教信者への道を選んだ。しかし、聖書にある「汝の隣人を愛する」ことはできても、「汝の敵を愛する」ことを実践した人に出くわしたことはない。その意味で、ナザレ園訪問は、人間とは何かを知る貴重な経験であった。

ナザレ園にいる入所者たちの歩んできた道は、決して平坦なものではなかった。韓国に渡り、一生懸命韓国人になろうと努力をしたのだろう。愛する人の国・韓国と自分が生まれ育った国・日本との間で、ナザレ園に暮らす入所者たちは悩み苦しみを抜いたに違いない。反日感情が強かった時代、中には外出することもできなかつたり、日本人であることを隠したりして生きてきたため、日本語を忘れてしまった方もいるようだ。今の日韓関係は、かつてのような高い壁はなくなった。毎日、飛行機や船を使い、何万

人もの人が行き来する時代になった。韓国の映画、歌、ドラマが日本で紹介され、逆に、日本の映画やドラマも韓国で紹介されている。そういった環境をみて、ナザレ園で暮らす入所者たちはいったい、何を思うのだろうか。「私の今までの人生は、いったい何だったんだろうね」と、ふとつぶやく入所者の言葉がずっしり心に重く響いた。日本と韓国を結んでいるものが、ここにもある気がしてならなかった。

<引用文献>

- ・上坂冬子 1998 慶州ナザレ園 忘れられた日本人妻たち 中央公論社 28-46
- ・宋美虎・喜田寛 2008 ナザレの愛 金龍成先生との約束 喜田寛総合研究所 35-37
- ・ソ・ヒョンソプ 2001 日韓あわせ鏡 西日本新聞社 25-30